

李進熙先生の歩みが投げかけてくれるもの

高柳俊男

李進熙先生のご逝去に際して、謹んでお悔やみを申し上げます。

朝鮮考古学という同学の方や、困難な時代の中で同じ課題解決のために苦闘されてきた在日朝鮮人の友人が大勢いらっしやる中で、奥様からとくに若輩者の私に弔辞のご指名をいただいたことに對して、大変おこがましい思いで恐縮しております。

「なぜ私か？」と考えてみたときに、思い当たることがいくつかあります。私はいま五十五歳ですが、実は二十歳のころから李進熙先生を直接に存じ上げており、そのお付き合いの長さがまずあるでしょう。あるいは二〇〇〇年、先生が自伝『海峽』（青丘文化社）を出版された際、『コリアン・マイノリティ研究』という雑誌の第四号に、私がやや長めの書評を書いたことも関係しているかもしれません。

しかし、もっとも最近のことで言えば、二〇一〇年度の後期に、所属する法政大学の大学院でこの自伝『海峽』をテキストに授業を行ない、最終回に当たる二〇一一年一月十三日に、著者である李進熙先生に実際に授業にお出でいただき、受講生たちと交流させていただいたことが影響しているかと思えます。実はその二日前に、癌の放射線治療がスタートしており、聞けばこの授業が先生にとって最後の授業となったそうです。初めてお目にかかって以来、何かとご指導をいただきましたが、あらためて大切な時とともに過ごさせていただいたと、感謝の気持ちで一杯です。

本日は、貴重な場をいただいたこの機会に、一世代下の日本人である私が、李進熙先生から何を

教えていただき、何を受け継いだかを述べて、三十五年に及ぶこれまでの御恩に報いたいと思います。

李進熙先生について考えると、四つぐらいの側面があり、そのいずれの面においても、私自身が身をもって体験してきた事柄があります。

まず第一には、やはり学者としての側面です。李進熙先生は一九五〇～六〇年代、十条の朝鮮高級学校や小平の朝鮮大学校など、民族教育の場で奮闘されますが、朝鮮総連の体質に嫌気がさして朝鮮大学校を退職した翌一九七二年に著わしたのが、主著『広開土王陵碑の研究』（吉川弘文館）です。これは五世紀の石碑である高句麗広開土王陵碑に十九世紀末、陸軍参謀本部が石灰を塗布して、日本の古代朝鮮支配を裏付ける証拠に改竄したという主張で、当時一大センセーションを巻き起こしました。のちに文革終了後、中国の学者からも否定的見解が表明され、改竄説はいまでは旗色が悪いようです。しかし、残された数多くの拓本の綿密な比較検討を通じて、日本の古代朝鮮支配を前提に考えていた当時の学界・言論界に問題提起をしたわけで、日本の古代史像の再検討に果たした意義はきわめて大きかったと言えるかと思えます。

専門の考古学・古代史研究もそうですが、現場を歩き、実物を見て考える研究態度は、のちの朝鮮通信使や朝鮮式山城、さらには韓国内の倭館・倭城など、いずれの研究にも貫徹されており、私も見習わねばと常々思わされております。

また、朝鮮史研究が学問的課題であると同時に社会問題としての側面の強かった時代においては、結論を性急に求めすぎるあまり、ともするとダブルスタンダードや善悪二分論的な議論に陥ることが少なからずありましたが、李進熙先生が普遍的な歴史観に裏打ちされた論を展開してくださったことも忘れられません。とりわけ私の印象に残る文章として、戦後五十年にあたる一九九五年に『季



高柳先生(右端)

刊青丘』第二号に書かれた「造営と撤去が意味するもの」があります。これは、北朝鮮の檀君廟造営と韓国の朝鮮総督府庁舎撤去を取り上げ、祖国である南北朝鮮の歪んだ歴史観や狭小な民族主義に對して、正面から批判を加えた文章でした。日本人の歪んだ朝鮮認識や間違った教科書記述に對して、早くから批判を展開してきた李進熙先生でしたが、それは「日本だから」批判するということではなく、かりに自国や自民族のことであっても、おかしいことはおかしいとはっきり主張していたわけです。

同様の意味で、困難な時代の中で、美術品を通して朝鮮民族との間に理解の橋を架けようとした柳宗悦に深い傾倒と造詣をお持ちだったことや、韓国からの留学生に日本のいい所をたくさん学んで帰るよう教諭していたことも、深く印象に残ります。

二番目には、教育者としての側面です。先ほど触れた朝鮮大学校辞任後の一九七〇年代後半以降、日本の明治大学や和光大学で非常勤講師を務め、のちに和光大学から専任教授として迎えられるました。とくに明治大学時代における教え子たちとの交流については、「李通信会」の方からの弔辞があとであることでしょう。

私はそういう意味での直接の教え子ではありませんが、実は一年間、李進熙先生の授業を聴講させていただいたことがあります。それは大学三年生からの専門課程を選ぶ際、中国文学科へ進学したものの、自分が本当に何をやるべきかを模索していた一九七九年か八〇年のことであつたと思います。李進熙先生の母校でもある明治大学の夜間部で、姜徳相先生と二コマ続きの授業に、いわば「ニセ学生」として参加させていただいたのです。そこでももちろん、例の高句麗好太王Ⅱ広開土王の碑についての詳しい解説がありました。同時にご自身の学生時代の思い出話も強く印象に残っています。学費や生活費を稼ぐため、昼間は担ぎ屋や土方の肉体労働をしてから夜に授業を受けるので、つい眠くなり、気づいたら教室から教授も学生も消えていたことがあつた、と語られて

いました。在日朝鮮人の置かれた境遇の厳しさを、あらためて実感する思いでした。

第三番目としては、編集者としての側面です。そしてそれこそが、私が李進熙先生と出会う直接の契機を与えてくれたものです。時期は一九七七年春、場所は新宿職安通りのアゼリア東広ビルにあつた三千里社の事務所です。

大学の一年生になつた一九七六年、私はアパート近くの本屋でたまたま雑誌『季刊三千里』を見つければ、何度か買って読んでいたところ、巻末にNHKに朝鮮語講座を要望する署名運動を始めた旨の記事が載っていました。身近な隣国なのに、NHKにことばを学ぶ講座がないのはおかしいと思ひ、また署名運動なら自分でもできるだろうと考えて、クラス（第二外国語として中国語を選択した学生のみ）の友人たちと春休みに、事務局のある三千里社を訪ねて行きました。そこでもらった署名用紙を持って、アパートの大家さんや近くのお豆腐屋さんを回りました。その帰省で戻つた郷里では、中学校時代の友人などを訪ねて賛同を得ました。そうして集めた百数十人分の署名をもって、二年生になつた四月に再度三千里社を訪ねたところ、同社の事務スタッフから、「せっかく集まつたのだから、署名を集約して解散というのほもつたいない。これから定期的に集まつて、勉強会でもやらないか？」と持ちかけられたのです。そして実際、その年の五月頃から三千里社の事務所に週一回集まつて、朝鮮関係の読書会を始めました。いまは週例会ではなく月例会ですが、これが現在まで続く「鐘声の会」の出発点です。最初の頃、テキストとして使われた本は、朝鮮史研究会編『朝鮮の歴史』（三省堂）、安宇植『金史良』（岩波新書）や金史良の作品、出版間もない梶村秀樹『朝鮮史』（講談社現代新書）などでした。

もちろんこれは、署名活動のなかで集まつたいくつかの大学の学生たちや、佐藤信行さんや高二三さんなど三千里社の事務スタッフと始めたことで、李進熙先生や金達寿さんをはじめとする編集委員が直接加わつたわけではありません。でも、読書会の曜日に、夕方早めに事務所に行くと、

李進熙編集長はじめ編集委員の方々がまだ残っていることも多かったです。たとえば赤ら顔の金達寿さんが畳やソファに身を横たえて、ゲラを読んでいることもありました。

李進熙先生とも、そうした場で最初の対面をしたはずですが、先生の印象は、いつも背広姿で居ずまい正しく、まさに紳士といった感じでした。人の目をまつすぐ見て、かつ微笑を絶やさず話すその対し方にも心惹かれましたが、やさしい目の奥でこちらの心の底まで見抜かれているような思いがして、思わず襟を正したりもしました。

当時は教養課程の学生で、時間にも比較的余裕があったので、私は三千里社に週一回の例会時だけでなく、年四回ある雑誌発行の度に発送のお手伝いに行きました。一日の労働の末に、近くの焼き肉屋で夕食をおごってもらうのです。いまだこそ新宿職安通りの周辺は、韓国の街並みかと思紛うほどハンガルの看板が溢れています。このころはまだそんな気配はなく、ごく一般的な焼き肉屋が数軒あったくらいです。

当時の書籍小包は、封筒に紐をかけることが義務づけられていたので、私の仕事はもっぱら紐かけでした。封筒の宛て名には日本を代表するそうそうたる知識人が、次から次へと登場するのです。そのときは、「この方も購読しているのか」と妙に興奮しましたが、あとで定期購読ではなく、寄贈が少なからずあることを知りました。つまり、この『季刊三千里』は、解放直後の雑誌『民主朝鮮』刊行の精神と同様、日本社会の朝鮮認識を正す一種の文化運動として、いわば営利を度外視して行なわれていたのです。その意味で、『季刊三千里』五〇号と後継誌『季刊青丘』二五号を通して編集長を全うした李進熙先生をはじめとする、編集委員や事務スタッフの献身的な仕事にあらためて頭が下がります。それを財政的に支えた広島の徐彩源さんなどオーナーたちの、歴史の表面には出ない地道な貢献についても忘れてはいけないと思います。

大学一、二年生の時から、こうした在日朝鮮人の活動を間近に見ながらも、三年次に向けた進路

選択の際に中国文学科に進んだ私でしたが、大学卒業時にまとめた論文は結局、「中西伊之助と朝鮮」でした。中西伊之助という一人の日本人が、朝鮮とどう関わり、どんな朝鮮人と交流をもって、それをどんな文学作品や評論に反映させたかについて、多くの雑誌を渉猟しながらまとめたもので、四〇〇字詰めで二〇〇枚近く書きました。そして、この論文執筆を契機に、大学院で近代日本と朝鮮との関係を本格的に学ぶ決意をして、あちこち「ニセ学生」をした結果、立教大学の山田昭次先生のもとで学ぶことになりました。

一九八一年に大学院に入学したあと、この論文「中西伊之助と朝鮮」を四分の一程度に要約して、『季刊三千里』第二九号に載せていただく機会を得ました。このとき以来、『季刊三千里』や『季刊青丘』には、何度も文章を書くことになりました。時には、書き手が見つからない時のピンチヒッターや埋め草としても登場しました。いわば読み手なしし下働きだった立場から、同じ雑誌の書き手にもなったのです。その意味で、『季刊三千里』とともに勉強し、成長させてもらったという点で、感謝を込めて自らを「三千里世代」と称しています。この雑誌が日本における韓国・朝鮮認識を改善し、朝鮮半島への関心や理解を促進するうえで果たした役割には、絶大なものがあつたと思います。もちろんそれは李進熙先生をはじめとする関係者に大きな犠牲を強いましたが、現在の「韓流ブーム」にもつながる新しい時代への変化を準備したという意味で、正当な評価が下されてしかるべきでしょう。

個人的な体験と強い分、どうしても李進熙先生のこの編集者としての側面についての言及が長くなってしまいました。最後に、四番目の側面を挙げるとすれば、一人の在日朝鮮人一世として、その生き方を力強く示した点があるかと思えます。

和光大学から出た「自筆年譜・著作目録」を改訂した青丘文化社版によれば、李進熙先生が日本に渡ってきたのは、戦後の一九四八年のことです。植民地支配終焉後、朝鮮半島で右派と左派の対

立が激化し、南北に体制を異にする二つの政権ができたこの年、李進熙先生がどんな思いとどんな手段で海峡を渡ったのか、その詳細はよくわかりません。しかし、南北分断のなかで生きる一人の在日朝鮮人一世として、初期には北朝鮮の社会主義建設に希望を見出し、のちにはそれと決別し、故郷である韓国とのつながりのなかに生きがいを求めて生きてきました。もちろん、その時々への選択は苦渋を伴うもので、とりわけかつて期待をかけた北朝鮮・朝鮮総連・社会主義思想との決別は、一朝一夕に決断できるほど軽いものではなかったでしょう。一九八一年、在日韓国人政治犯への寛大な処置を求めて出かけたいわゆる「三氏訪韓」（金達寿・姜在彦のお二人）は、当時激しい議論を呼び、結果的に多くの友人と袂を分かつことにもつながったと思われまます。

また、まさに民族主義一辺倒ではなく、柔軟な思考をお持ちだったことに触れましたが、それでも在日二世などの若い世代からすれば、違和感を覚えることもあったかもしれません。同じ李家の経てきた歩みが、奥様の呉文子さんによって「パンソリに想い秘めるとき」（学生社）として綴られています。戦後渡日した一世の李進熙先生と日本生まれの二世の呉文子さんとは、同じ事象を描きながらも、その描き方や捉え方に微妙な違いが窺われます。

さらには、もつと若い世代との間には、より深刻な認識の差異もあることでしよう。私とほぼ同年代の在日二世の皆さんが、自らの率直な意見発表の場として雑誌『ほるもん文化』を創刊したとき、李進熙先生が激しい口調でおっしゃった言葉を覚えています。「わが朝鮮には『三千里』『青丘』『鶏林』『權域』など、自国を示すきれいな言葉がたくさんあるのに、なんでよりによってそんなくだらないタイトルにしたのか」と。

日本社会の差別状況や南北朝鮮の独裁・分断など、在日朝鮮人をめぐる複雑で重層的な構造は、その時代を生きる人々に日々何らかの判断を迫ってきます。その中で李進熙先生も多くの判断を繰り返しながら、紆余曲折に満ちた現代史を生きてきました。それは、義父の関貴星『楽園の夢破れ』として一つの生き方を鮮やかに示した点で、李進熙先生の貢献はやはり言うておく必要があると思いますし、私が授業で自伝『海峡』を取り上げた意図もそこにあります。

『コリアン・マイノリティ研究』に書いた『海峡』の書評では、日本での経験だけではなく、渡日自体や、渡日に至る朝鮮半島での前半生も読んでみたい思いに駆られると記しました。先生のご逝去により、すでにそれは叶わぬものとなりましたが、この三五年間に雑誌発行を通じて、学問研究を媒介にして、そして何よりも一人の生身の在日朝鮮人一世の生き方を通じて投げかけてくださった数々の課題やヒントを、今後も一世代下の日本人の一人として代を継いで考え、活かしていく所存です。

李進熙先生、長い間どうもありがとうございました。どうぞ安らかにお休みください。

※この追悼文は、告別式における弔辞に、個人的な想い出を大幅に書き加えてまとめ直したものです。

追想 李進熙

発行 二〇二三年四月十五日

発行委員 姜在彦・大塚初重・上田正昭

前田耕作・高柳俊男・阿部英雄

服部敬史・遠藤和弘・坂本綾子

発行人 呉文子

調布市国領町一・二五・二〇・四〇六

製作 社会評論社

東京都文京区本郷二・三・一〇 お茶の水ビル